

脆弱化してゆく宗教

——エマスの「神学部講演」について——

持 留 浩 二

アメリカの思想家ラルフ・ウォルドー・エマスの「神学部講演」を通して、「神」と「人間の魂」の関係について論じている。まず「神学部講演」の内容を吟味し、エマスの神に関する考えを明らかにしている。次に、「神」を論じる上では宗教の背景を考慮に入れる必要があるので、西洋においていかにして宗教が弱体化していったのかを考察している。最後に結論としては、宗教が脆弱化したことによって「神」は抑圧され、つづいて「人間の魂」が抑圧されることとなったが、「神」を解放する鍵は、エマスが主張するように、「人間の魂」の解放にあること、言い換えれば、「神」と「人間の魂」は互いに互いを活性化させるものであり、互いに調和をもって機能することが不可欠であるということを述べている。

キーワード：内なる神，科学，信仰，道德感情，抑圧。

序 論

我々人間が無意識内に抑圧しているものによって、思いのほかの影響を受けていることを明らかにした上で、フロイトは人間の抑圧している「性」の重要性を指摘した。その後の精神分析学の発展によって、彼の考えは広く心理学者の間に受け入れられるようになってきた。そして現代では「性」はそれほど抑圧の対象となっていないのではなかろうか。実際、フロイトが彼の理論を発表するのに困難を感じていた時代においては、「学者」たるものは、性を論じるときに顔を赤らめねばならなかったが、今ではむしろ、学者は「魂」のことを口に出すとき顔を赤らめねばならないのではな

いだろうか。現代という時代は魂を抑圧している。¹⁾

人間の「魂」の科学的解明を目指して精神分析という画期的な方法を発明したジグムント・フロイト (Sigmund Freud) にとって神への信仰というものは、成熟した人間ならば破棄すべき幻想でしかなかった。しかしフロイトの後に精神分析をさらに発展させてより深く人間の心理を探究することに人生を費やした C・G・ユング (Carl Gustav Jung) は宗教を積極的にとらえ、「神」というものは心理的に実在するもの以外のなにものでもないと確信するに至った。おそらくこの二人の立場の違いは、フロイトには信仰というものが、個人的な、浅いレベルの問題としてしか見えなかったのに対し、ユングにはそれが普遍的な、深いレベルの問題としても見る事ができたというところからくるのだろう。しかし現代の世界においては、フロイトのように、個人的な、浅いレベルの問題としてしか見えなほどに、宗教は完全に脆弱化してしまっているように思われる。文明は今も発展をつづけているが、そこでは相変わらず宗教や「神」の問題が解決されることなく隅のほうに追いやられてしまっているのである。かつて人間の「魂」の歴史の中で人間がその精神を発展させていくにおいて「神」が大きな役割を果たしたことは間違いのなかったことであろう。しかし宗教は力を失ってしまい、その後すぐに、まるで宗教の弱体化に呼応するかのように、人間の「魂」が抑圧されてしまったかのごとく思われるのである。この一致は偶然のものであろうか。私には「魂」と「神」の問題が密接に関わりあっているように思われるのである。この論文では、19 世紀アメリカの思想家ラルフ・ウォルドー・エマスン (Ralph Waldo Emerson) の「神学部講演」(“The Divinity School Address”) を通して脆弱化していったキリスト教の姿を追っていくとともに、人間の「魂」と「神」とがどのようにに関わりあっているのかということにも目を向けてみたいと思う。エマスは「神学部講演」において「神」への信仰という問題と「魂」の解放という問題を取り扱っている。彼もおそらくこの二つの問題が決して切り放すことのできない問題だと考えていたのであろう。

I

そこでまず、エマスの「神学部講演」がどのようなものであるのか、そこでどのような問題が論じられ、その問題に対してエマスによりどのような解答が与えられているのかを見ていきたいと思う。エマスは「神学部講演」の中で、「道德感情」(“the sentiment of virtue,” or, “the moral sentiment”),あるいは「道德的本性」(“the moral nature”)という言葉を用いているが、それらはほとんど同じことを意味していると考えられる。エマスは、「神」への信仰はその「道德感情」と彼が呼ぶものによって得られるのだと言っている。「神学部講演」のなかで彼は次のように言っている。

A more secret, sweet, and overpowering beauty appears to man when his heart and mind open to the sentiment of virtue. Then he is instructed in what is above him. He learns that his being is without bound ; that to the good, to the perfect, he is born, low as he now lies in evil and weakness.²⁾

またエマスは同じ「神学部講演」の中で、「道德感情とは、疑う余地のない神聖な法則を前にしたときに湧き起こる崇敬の念であり喜びなのです³⁾」とも言っている。さらにつづけて彼は「道德感情」を詳しく説明し、「道德感情を直感することは、魂の法則の完璧さを洞察することです。これらの法則は自分で自分を実施しています。時間や空間の外にあって、状況に左右されることもありません⁴⁾」と言うのである。

エマスがここで言う「善なるもの」(“the good”), 「完全であるもの」(“the perfect”), 「神」という言葉がどういうものを意味しているのかについては詳しく吟味する必要があるだろう。ただ、一つ言えることは、彼にとって、「道德感情」の認識が彼のまったく個人的な体験に基づくものであるということである。それゆえ我々がこの彼の体験がどういうものであるかを理解しようとし

でも、そこにはある程度の限界があるわけである。もともと宗教において「神」というものはただ単に理性的に捉えられるものではなかった。「神」は、理性を含めて全てを超越する存在であり、人間が考えることのできる次元をはるかに超えた存在であった。それゆえ「神」は、究極的には、各々にとって個人的なものでしかありえず、理性的に捉えられる客観的な「神」などは存在しなかったのである。『神の歴史』(A History of God)のなかでカレン・アームストロング (Karen Armstrong) は次のように言っている。

ある世代の人間の一群が形成した神の理念は、ほかの集団にとっては無意味でありえた。事実、「私は神を信じる」という言説は、それ自体としては何ら客観的な意味を持っていない。そうではなくそれは、ほかの全ての言説と同様に、特定の共同体によって宣言された特定の文脈の中でのみ何事かを意味するものである。したがって、「神」という言葉の中に含まれている唯一の普遍の理念なるものがあるというのではなく、その言葉は、極めて広い意味を持っているのであり、あるものは互いに矛盾し排除し合うものですらある。神という理念が、このような柔軟性を持っていなかったならば、生き残って人間の偉大な理念の一つになることなどなかったであろう。⁹⁾

実際アームストロングが言うように、「神」という言葉は余りにも多くの含意を抱え込んでおり、そのためにこの言葉が言葉としてきちんと機能しているのかどうかさえ疑わしくなってくるほどである。余りにも多くの含意を持つ言葉はかえってコミュニケーションにおいて有害なものとさえなりうる。それゆえ現在まで「神」をめぐる論争に余りに多くの誤解を生んできたのも無理はないわけである。もしこのような混乱を避けようと思えば、我々は「神」や、あるいは「魂」、「精神」などという言葉を用いる際に細心の注意を払う必要がある。多くの含意を持っているそれらの言葉には、人それぞれが違った意味を与えている可能性が高い。しかも「神」という言葉ほどに余りに多くの含意が与えられていれば、その言葉自体が一体どれほどの広がりを持つものなのかさえ

分からなくなってくるのである。

とは言うものの、この問題を論じるにおいて一つ確実なことは、太古から現在まで、人間が「神」という言葉でしか表現しようとする事ができなかったあるリアリティーが存在したということである。いまだにその中身ははっきりしていないのだが、しかしその「あるリアリティー」が圧倒的な力を持ち、人間の運命を左右し、自然の法則を司ってきたと信じられてきたということは事実なのである。人はそれを決して否定できない実在とし、それを「神」と呼んできた。だから、いくら科学が「神」の存在をばかばかしいものとして一笑に付そうと、論理が「神」の矛盾点を暴露しようと、絶望した信仰者が「神」を断罪したとしても、今までに人間が「神」としか呼べなかったリアリティーの存在までは否定できないのである。それゆえ「神」に対するもっとも科学的なアプローチは、それを否定したり肯定したりして思考停止に陥ることではなくて、「神」のリアリティーの意味を問い続けることであろう。そしてそうして問い続けることにより、「神」の概念はやがて細分化されていくことだろう。

話を元に戻そうと思う。エマスの言う「道德感情」をもう少し明確にしておきたい。「道德感情」を尾形敏彦教授は『ウォルドー・エマス』の中で次のように説明している。

ただし、この講演では、彼は精神という言葉の代りに道德感情という言葉を用いた。講演が進むにつれて、幾分明瞭になってくるが、道德感情とは精神・理性・直感・想像力などの別名であり、彼にとって最も重要な言葉の一つである。⁹⁾

このように説明した後、尾形教授はさらに、「この講演においては、道德感情とは個人に神性を与えるものだ」とエマスは語ったが、その後、ボストンにおける冬期連続講演（1841-42）では、さらに進んで、道德感情とは神の別名だと述べた¹⁰⁾と述べている。さきほど「神学部講演」から引用した「道德感情」に関する言及から見ても、この「道德感情」は神と密接に結びついたものであるということは間違いないことなのである。

以上のような「道徳感情」について述べた後、エマソンは人間と神との関係へと言及する。そこにはエマソンの神学に特徴的な「内なる神」という考えが述べられている。

If a man is at heart just, then in so far is he God ; the safety of God, the immortality of God, the majesty of God do enter into that man with justice.⁸⁾

この論理的帰結はエマソンにとって当然のものであったと思われる。なぜなら人間の心の中に浮かび上がる「道徳感情」が神と結びついている以上、ある意味で神は人間の心に内在するということになるからである。さらにエマソンは、「私の中に神がいると教えてくれるものは私を強くしてくれます。私の外に神がいると教えるものは私をとるに足らぬつまらないものにしてしまいます⁹⁾」と述べ、カルヴィニズムの「外在する神」という立場と反対の立場を明確にしている。

このように「内なる神」と人間との理想的な関係を述べた後、エマソンは次に教会批判に移る。まず彼はイエス・キリストを曲解してしまった教会を非難している。

Alone in all history he estimated the greatness of man. One man was true to what is in you and me. He saw that God incarnates himself in man, and evermore goes forth anew to take possession of his World. . . . But what a distortion did his doctrine and memory suffer in the same, in the next, and the following ages! . . . The idioms of his language and the figures of his rhetoric have usurped the place of his truth ; and churches are not built on his principles, but on his tropes. . . .

. . . Having seen that the law in us is commanding, he would not suffer it to be commanded. Boldly, with hand, and heart, and life, he

declared it was God. Thus is he, as I think, the only soul in history who has appreciated the worth of man.¹⁰⁾

そして教会における第一の欠点をエマスン是指摘する。彼によると、キリスト教の教義は魂の教義ではなくて、個人的なもの、実証的なもの、儀式的なもの、の誇張になってしまっているのである。そしてイエス個人に関する有害な誇張にばかり執着しているのである。確かにエマスンが主張しているように、キリスト教はイエス・キリストをキリスト教徒にとっての唯一の正しいモデルとし、イエスが目指した方向へと向かうためにイエスが辿った道筋のみが唯一の正しい道であるという教えを説いてきた。イエスが目指した目的地を山の頂上にたとえるならば、頂上へと至る道はたくさんあるはずなのに、キリスト教はイエスが辿った道のみを正統とし、その他は異端としたのである。エマスンのような「自己信頼」の人にとって、そういう伝統的なキリスト教の教えは受け入れられるものではなかった。彼は次のように言って、教会への不満をぶちまけている。

You shall not be a man even. You shall not own the world ; you shall not dare and live after the infinite Law that is in you, and in company with the infinite Beauty which heaven and earth reflect to you in all lovely forms ; but you must subordinate your nature to Christ's nature ; ...¹¹⁾

エマスンはあくまでも自分の道を歩もうとしたのである。そしてそんな彼にとって道標となったのが「道徳感情」であったのだろう。自らの道を切り開かねばならなかったエマスンにとって、唯一己の心が感じるものだけが信じるに値するものであったのかも知れない。

次にエマスンはキリスト教会の第二の欠点へと話を進める。彼はそれを第一の欠点からくる当然の結果だと言う。彼によると、啓示されると神自身が開いた魂の中へ入り込む法則の中の法則である「道徳的本性」が社会公認の教義の

源泉としては探究されていないというのである。エマスンが考えるに、「道徳感情」が探究されない宗教は形骸化する一方であり、そのような教会での説教は、生き生きとした魂の叫びが姿を消し、形式の繰り返しでしかないものに過ぎなかった。これはエマスンが最も嫌ったものであった。彼にとって、そこにはもはや宗教的情熱も、魂も、神も、見当たらない世界が横たわっていたのである。彼は自らの教会に対する絶望から次のように断言する。

From the views I have already expressed, you will infer the sad conviction, which I share, I believe, with numbers, of the universal decay and now almost death of faith in society. The soul is not preached. The Church seems to totter to its fall, almost all life extinct.¹²⁾

このように論じた後、エマスンはある無能な牧師の話を語る。この牧師はエマスンが最も嫌う形骸化した教会の牧師を具現化したような牧師であり、彼のような「魂」の抜けた牧師はエマスンにとって死でしかなかった。

I once heard a preacher who sorely tempted me to say I would go to church no more. Men go, thought I, where they are wont to go, else had no soul entered the temple in the afternoon. A snow-storm was falling around us. The snow-storm was real, the preacher merely spectral, and the eye felt the sad contrast in looking at him, and then out of the window behind him into the beautiful meteor of the snow. He had lived in vain.¹³⁾

エマスンはこのように詩的なレトリックを使いながらも、教会に対する怒りをあらわにし、かなり感情的になりながらこの牧師を非難した。いやこの牧師のような浅薄な信仰しか持てない全ての人間を非難したのであろう。しかし特に聖職者にとっては、一般の教徒よりも責任が重かったはずである。先程述べたように、余りにも熱意に満ちていたエマスンにとって、情熱こそが「生」で

あり、有益なものであって、情熱の欠けたものは「死」であり、無駄なものでしかなかったのである。「神学部講演」の中でエマスンが善悪を論じるとき、「善は実在です。悪は欠乏に過ぎず、絶対的なものではありません。それは寒冷のようなものであり、寒冷というのは熱を欠いたものなのです。全ての悪は完全に死、あるいは非実在なのです。仁愛は絶対的で実在です。仁愛を多く持てば持つほど、その人は大きな生命力を持っているということになります¹⁴⁾」という言い方をしているが、彼にとって悪というものは、まさにこの無能な牧師のような情熱に欠けたものであったのかも知れない。さらにエマスンは次のように続ける。

It is already beginning to indicate character and religion to withdraw from the religious meetings. I have heard a devout person, who prized the Sabbath, say in bitterness of heart, "On Sundays, it seems wicked to go to church." . . .

My friends, in these two errors, I think, I find the causes of a decaying church and a wasting unbelief. And what greater calamity can fall upon a nation than the loss of worship? Then all things go to decay. Genius leaves the temple to haunt the senate or the market. Literature becomes frivolous. Science is cold.¹⁵⁾

ここに見られるように、エマスンは「魂」のことを論じているうちに「神への信仰」へと言及せざるをえなくなるのである。おそらく彼にとって健全な「魂」を維持するには健全な「神への信仰」が不可欠であったのであろう。彼にとって、あるいは19世紀の多くのアメリカ人にとって、「魂」と「神」はまだ互いに密接に結びついており、現代人が考えるように、神なき自由な魂というのは彼らには考えられなかったのかもしれない。このことは現代における宗教なき時代の「抑圧された魂」という問題を解く鍵を与えてくれているような気がする。もしかつて宗教を根拠なき幻想として片づけてしまったそのつけを今になって我々が支払わなければならないくなっているのだとすれば、「抑圧された

魂」を解放する方法は、我々が「原始的なもの」というレッテルを貼り、抑圧してしまった宗教の意味を再び問い直すことにあると言えるのではないだろうか。

さてここで今度は、「神学部講演」におけるエマスンが理想とする信仰の姿を明らかにしていきたい。それを明らかにすることによって「抑圧された魂」の問題を解く鍵が見つかるかも知れない。

Meantime, whilst the doors of the temple stand open, night and day, before every man, and the oracles of this truth cease never, it is guarded by one stern condition; this, namely; it is an intuition. It cannot be received at second hand. Truly speaking, it is not instruction, but provocation, that I can receive from another soul. What he announces, I must find true in me, or reject; and on his word, or as his second, be he who he may, I can accept nothing.¹⁶⁾

では「真理」を掴むためにはどこへ向かって「直感」を使えばよいのであろうか。エマスンは、我々が各々の「内なる神」へ向かって「直感」を使わねばならないのだと主張する。エマスンが、「彼ら（素朴な人々）には、世界が彼（イエス・キリスト）のために存在しているように見えます。しかしそれでは彼らはまだイエスの言わんとするところのものを深く理解できてはいないので。彼ら自らへと；あるいは彼らの心の中にいる神へと立ち返らないかぎり、彼らは永遠に成長することが出来ないのです¹⁷⁾」と言うように、我々は各々の中に存在する「内なる神」を拠所とせねばならないのである。そうすることによって我々ははじめて生き生きした「魂」や理想的な「神への信仰」を取り戻すことができるのであり、当時の社会にはびこっていた信仰の形骸化から逃れることができるのである。それはまた、「生きている」という証拠でもあった。

The spirit only can teach. Not any profane man, not any sensual, not any liar, not any slave can teach, but only he can give, who has; he

only can create, who is. The man on whom the soul descends, through whom the soul speaks, alone can teach. Courage, piety, love, wisdom, can teach ; and every man can open his door to these angels, and they shall bring him the gift of tongues.¹⁸⁾

形骸化してゆくキリスト教を救おうとする試みが「神学部講演」であったと言っている。エマソンは、キリスト教が形骸化していったのは教会が「道徳感情」を軽視したためであると述べている。しかしながらその「道徳感情」にこそ崇高なものがああり、驚異と活力の源泉があるのである。

さらにエマソンは本当の教師の職務はどういうものであるかを次のように言っている。まず、「私たちに、神はかつて存在したものではなく、今も存在しているのだということ、すでに語り終えたのではなく、今も語っているのだということ」を教えてくれるのが真の教師の職務です¹⁹⁾と指摘する。さらに彼は神学部の卒業生たちに向かって次のように訴える。「皆さんに言いたいことは、何よりもまず、独り立ちしてもらいたいということです。よい模範を拒否してください。たとえそれが人々の頭の中で神聖視されているものであってもです。そして仲介者もバールもなしに、敢然と神を愛してください²⁰⁾」。

最後にエマソンは人間の「魂」の重要性を指摘する。それまでは深遠のはるか向こうにあって決して手の届かなかった「神」を「人間の魂」にまで引き寄せたエマソンにとって、形骸化してゆくキリスト教を救えるのは「人間の魂」以外にはなかった。エマソンは、抑圧された「神」を解放するために必要となるのが「人間の魂」であると言っているのである。ここではもはや「神」は「人間の魂」にとって従属すべき存在ではないことが明白となっている。むしろ「魂」には「神」に匹敵するほどの偉大さが与えられているのである。少なくとも「神学部講演」においてエマソンは、「魂」と「神」は互いが互いに対して欠けがえのないものであり、互いを活性化するものであると考えているようである。「神学部講演」の中で、あるべき「神への信仰」の姿を論じ続けてきたエマソンは、その最後の部分で声高らかに「魂」の重要性を叫ぶ。そこではもはや歴

史的キリスト教におけるような、「神」に従属すべきものとしての「魂」はどこにも見あたらない。

And now let us do what we can to rekindle the smouldering, nigh quenched fire on the altar. The evils of the church that now is are manifest. The question returns, What shall we do? I confess, all attempts to project and establish a Cultus with new rites and forms, seem to me vain. Faith makes us, and not we it, and faith makes its own forms. All attempts to contrive a system are as cold as the new worship introduced by the French to the goddess of Reason,—to-day, pasteboard and filigree, and ending to-morrow in madness and murder. Rather let the breath of new life be breathed by you through the forms already existing. For if once you are alive, you shall find they shall become plastic and new. The remedy to their deformity is first, soul, and second, soul, and evermore, soul.²¹⁾

II

今まで見てきたように、エマソンは「神学部講演」を通して、脆弱化していくキリスト教を攻撃し続けた。そこで次に、西洋におけるこのような宗教の脆弱化の背景には一体どういう要因があったのかを検証してみたい。西洋において、古来からのキリスト教が弱体化へと大きく変化するに至った最初の変化は、おそらく近代科学によるのだろう。西洋において、近代科学の理性主義はそれまで広く受け入れられてきた宗教の世界観とは相容れないものとなってしまった。それまで宗教的な世界観しか持てなかった人々は、近代科学によって新しく科学的な世界観を持つことができたのである。そしてこれら二つの世界観は、当時の西洋においては明らかに対立してしまっていた。現代においてもこの対立は、程度の差こそあれ、まだ続いているように思われる。科学にこそ真理があるのだと無垢に信じ続けている多くの現代人は、この世のあらゆる現

象が理性的に解明されるだろうと信じ込み、必ずしも理性的ではない部分を持ち続ける宗教を、非現実的なもの、信用のおけないもの、怪しいものと考えている。逆に宗教的なものに価値を置く人が、科学を否定し理性主義を否定したとしても、まわりから相手にされず、そういう天然記念物みたいになってしまった人々は、明らかにマイノリティーとなってしまう、まわりから孤立していくしかない。

しかしおそらく実のところは、近代科学的な理性主義には明らかに限界があり、また宗教の世界観は、それが字義通りのものとしてではなく、象徴として、心的現実として生きているのであろう。西洋における宗教対科学という対立は、誤った認識の上に生じた対立であったように思われる。アームストロングが言うように、「(ムスリムにとって) 自然科学は、キリスト教の場合のように、宗教に対する危険と見られることは決してなかった。自然界の働きについての研究は、それが超越的な次元と源泉を持っていることを示すのであり、それについてはわれわれはただしるしとして象徴によって語ることが出来るだけなのである。預言者の話であれ、最後の審判の物語であれ、天国の悦楽であれ、それらは文字通りに解釈されるべきではなく、より高い表現不可能なりアリティーのたとえとしてのみ解釈されるべきものであった²²⁾」。

そして西洋において、宗教を孤立化させた挙げ句に、さらに宗教の価値を低下させるに至った原因を作ったのは宗教改革であったのだとアームストロングは述べる。より正確に言うと、科学を宗教と相容れないものとしてしまったのが宗教改革であるというのである。

末日のカルヴァン主義の予定の神学は、神の逆説と神秘がもはや詩として見なされず、一貫してはいるが恐ろしい論理によって解釈されるとき、どのようなことが起こりうるかを示している。聖書がひとたび象徴的ではなく文字通りに解釈されはじめると、その神の観念は不可能なものになるのだ。地上で起きる一切のことに文字通りに責任がある神などを想像することは、不可能な矛盾を含み込むことになる。聖書の「神」は超越的リアリティーの象徴であることをやめてしまい、残酷な専制君主的な暴君にな

ってしまうのだ。予定の教義はそのような人格化された神の限界を示すものなのである。²³⁾

さらにアームストロングは、宗教の脆弱化の背景を極めて明確に説明している。それによると以下ようになる。イスラム教世界において、ムッラ・サドラ（Mulla Sadra, イラクのイスラム思想家で、神秘主義的な接近に反対し、神の本質が全ての存在の源泉であることを現実的な知識で捉えようとした）がムスリームに向かって、天国や地獄が個々人の想像上の世界に位置しているのだと教え、ユダヤ教世界においてはカバリストたちが聖書的な天地創造の物語を意図的に象徴的な仕方で解釈し、弟子たちにこの神話を文字通りに受け取ってはならないと忠告していたときに、カトリックもプロテスタントも聖書はいかなる詳細においても事実として本当なのだと主張してしまっていたというのである。つまり西洋のキリスト教徒は、彼らの信仰の字義通りの理解に打ち込むようになり、神話から離れて取り返しのつかない方向へと踏み出してしまったわけである。聖書の物語は事実として真実であるかそれとも幻想であるか、ということになってしまったのだ。そしてこのことが、伝統的な宗教的神話を新しい科学に対して脆弱なものにし、ついには多くの人々にとって、神を信じることを完全に不可能にさせることとなった。宗教改革以来、そしてプロテスタントとカトリックの間のアリストテレス主義への新しい熱狂がはじまって以来、彼らは、神があたかも他の全ての客観的事実であるかのように論じ始めたのである。このことは究極的には、十八世紀後半の、また十九世紀初頭の新しい「無神論者」たちが、完全に神を排除してしまうのを可能にしてしまったのである。

アームストロングはあくまでも、宗教においてその中心にあるのが「言語に絶したリアリティー」であることを重視する。彼女はあるべき信仰の姿を次のように描写している。

ユダヤ教徒もムスリームも正統教会のキリスト教徒もみな、それぞれ違った仕方において、神についてのわれわれ人間の観念は、言語に絶したリア

リティーに対応するものではないことを強調してきた。人間の観念はそのリアリティーの一つの象徴にすぎないのである。彼らはみな、あれやこれやの時には、神を最高存在として描くよりも「無」として描くほうがより正確であると提案してきた。なぜなら「彼」は我々が認識できるような仕方では決して存在していないからである。何世紀にもわたって、西欧はこのより創造的な神概念を見失ってしまったのだ。カトリックもプロテスタントも、「彼」を我々が知っている世界に付け加えられた「もう一つの別の（an-other）実在であるような存在、そしてわれわれの諸活動を監督している天の「兄」のような存在と見なしてきた。こういう神の観念が、革命後の世界の多くの人々に全く受け入れがたいものであったことは驚くに値しない。なぜならそれは、人間を卑しい奴隷の状態と、人間的尊厳とは両立しない価値なき依存性に呪縛しているように思えたからである。十九世紀の無神論的哲学者たちがこうした神に反抗したのには、十分な理由があったのだ。彼らの批判は、多くの同時代人が同様なことをするように勇気づけた。彼らは何か全く新しいことを言っているように見えたが、彼らが「神」の問題に立ち向かっていったとき、実は彼らはしばしば無意識に過去のはかの唯一神論者たちの古い洞察を反復していたのである。²⁴⁾

結 論

以上のアームストロングの指摘によると、宗教を脆弱化させるのに主な役割を果たしたのが近代科学の理性主義と、宗教側の偏狭な字義主義、言い換えれば創造的な信仰の喪失、にあるということになる。人々は近代科学の理性万能主義に惑わされ、理性的なもののみが価値あるものであるという偏った世界観を持ってしまったのである。しかしながら、近代科学の理性的な世界観の中には、それまでの世界においてあまりにも偉大であった「神」の居場所は見当たらなかった。理性主義に立つ限り、非理性的な部分が重きをなす「宗教」は、決して受け入れることのできるものではなかった。そして彼らが唯一そんな「宗教」に対して取れる態度は、それら全てを幻想か夢のようなものだとし、非合

理的であり非現実的なものというレッテルを貼ることであった。そのようにして「宗教」を価値なきものとして社会から葬り去ることであったのだ。「宗教」と「科学」は対立し、「科学」が勝利し、「宗教」は敗北し、そして今や「魂」は、なぜか「宗教」や「神」とともに人間にとって現実味の薄いものとなってしまったのである。しかしもし人々が、アームストロングが言うような創造的な信仰をつくりだすことが出来たなら、宗教の脆弱化は防げたはずだった。だが現実にはキリスト教は偏狭な字義主義に陥り、その時代に合う新たな神概念を創造することが出来なかったのである。その結果、「神」は抑圧され、「人間の魂」もその後同じ運命を辿ることとなった。そして、エマスンが「神学部講演」の中で指摘したように、「神」や「人間の魂」を抑圧した結果、キリスト教は形式主義に陥ることになってしまった。すでに確立された権威にしがみつき、新たなものを創造しようという意欲を失ってしまったのである。その後の、キリスト教の形式主義、権威主義の弊害は、エマスンが「神学部講演」で指摘した通りである。エマスンにはその形式主義や権威主義が宗教を死へ導いていると感じられたのであろう。とすると、そこから逃れる唯一の方法は、「神」や「人間の魂」を抑圧の状態から解放すること以外にはありえない。彼が「神学部講演」の中で求めたのはまさにそれであったのだと考えられる。

神が健全に存在していた時には、人々は今よりもうまく神との関係を保っていたのであろう。人間には、その内的、外的な世界において、自分にとって関与できる部分と関与できない部分とがある。我々は理性において自分が何をしようかを決定することができる能力があるが、逆に自分にはどうしようもなく関与できない部分も存在する。宗教が生命を持っており、神が生きていた時代においては、人々は自分にとって関与できる部分だけを責任をもって受けもっていればよかった。自分にとって関与できない部分については一切を神に任せ、結果は神の御意志とすればそれで良かったのである。しかし神がその存在を希薄なものとされてしまった今となつては、人々には過剰な責任とストレスが科せられてしまうこととなった。人々は自分にとって関与できない運命にさえ悩まされているように思われる。いや「神」を退けたがために、それが自分にとって関与できないものであるということにさえ気づかないでいるのであ

る。神はそれまで受けもっていた役割を果たすことができなくなった。そして人間はある種の大きな喪失感を抱え込んでしまっているように思われる。それは「神」がいなくなった跡なのである。いや神はまだ存在しているはずである。我々の生命の基盤であり、力の源泉としての神はまだ存在している。ただ人々が「神」を抑圧しているのだ。我々が「神」を解放する準備ができれば、いつだって「神」はリアリティーを取り戻すはずだ。そして「神」と肯定的な関係が持てれば、すぐにでも「神」はその役割を担ってくれるはずなのである。

「神学部講演」の最後のところで、「形式のいびつさを救うものは、第一に魂、第二に魂、そして永遠に魂なのです」と言うとき、エマソンは確かに「魂」の解放が「神」の解放をもたらすことを確信しているように思われる。そして「内なる神」を直感によって解放することにより、「魂」はより生き生きとしたものとなる。まるで相乗効果を生むかのように、「神」と「魂」は互いに互いを活性化させるのである。つまり健全な精神を維持するためにはその二つが調和をもって機能することが不可欠だということなのである。だから、「神」が抑圧され、不当な立場に置かれていては、「精神」はうまく機能することができないであろう。逆に「精神」が不当に抑圧されていれば、「神」はうまく機能することができないのである。「神」の解放と「魂」の解放は互いに密接に結びついていると言えるのではないだろうか。

註

- 1) C.G. ユング著、小川捷之訳、『分析心理学』（みすず書房、1992）、p. i – ii、引用箇所は河合隼雄氏による日本語版序より。
- 2) Ralph Waldo Emerson, “The Divinity School Address,” *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, 2nd ed., Vol. 1, Centenary Edition, The Riverside Press, 1903, New York: AMS, 1979, 120.
- 3) Emerson 121.
- 4) Emerson 122.
- 5) カレン・アームストロング著、高尾利数訳、『神の歴史』（柏書房、1995）、p. 12.
- 6) 尾形敏彦著、『ウォルドー・エマソン』（あぼろん社、1991）、p. 155.
- 7) Ibid., p. 161.
- 8) Emerson 122.

- 9) Emerson 132.
- 10) Emerson 128-130.
- 11) Emerson 131.
- 12) Emerson 135.
- 13) Emerson 137-138.
- 14) Emerson 124.
- 15) Emerson 143.
- 16) Emerson 126-127.
- 17) Emerson 132.
- 18) Emerson 135.
- 19) Emerson 144.
- 20) Emerson 145.
- 21) Emerson 149-150.
- 22) カレン・アームストロング著、『神の歴史』, p. 201.
- 23) Ibid., p. 380.
- 24) Ibid., p. 466.

(もちどめ こうじ 文学研究科英米文学専攻 博士後期課程)

(1995 年 10 月 25 日受理)